

1. 2 の質問のあと採決に入った。結果は、
 賛成 532名 (出席者 228 書面参加 304)
 反対 6名 (出席者 0 書面参加 6)
 (白票：書面参加 4)

よって原案どおり可決された。

(4) 選挙管理委員会の任務を明確化するための細則の追加(細則第7条)

これについては、「前の選挙で判定をする基準がないので困難したが、このような重要な仕事を小人数でやるのは問題である。人数をもっと増すべきである」(広田)「無効投票の判定基準は問題として残る」(神山)など意見が出されたが、「運営に当っては細則に照して公正にやって行こう」という申し合わせの結果採決に入った。

賛成 533名 (出席者 226 書面参加 307)
 反対 3名 (出席者 0 書面参加 3)
 (白票：書面参加 4)

よって原案どおり可決された。

(5) 理事選出法の改正にともなう各地区の理事定数の

改訂(細則第7条)

採決の結果

賛成 508名 (出席者 219 書面参加 289)
 反対 21名 (出席者 0 書面参加 21)

(白票：書面参加 4)

よって原案どおり可決された。

その他

○ 会費値上げの件について「学生会員のほかに収入の少い若い学会員も多数いることを考慮に入れ検討してほしい」(中島)と要望があった。

○ 大気物理研究所のその後の経過について質問(窪田)があり、山本理事から「これまでは正野委員長の病気等のため事務が停滞していたが、推進態勢にもやや見通しがついたので再度検討できるようにし、来年春までに目途をたてたい」と回答があった。

43年度当番支部

昭和43年度当番支部はつぎのように決った。

春(総会) 東京

秋(大会) 名古屋

〔書評〕

International Meteorological Vocabulary

WMOで諸国の気象学者の協力のもとに、用語集「レキシク・メテオロジク」を編さんしていることは、その事務局からそれに関する照合を受けたことで、気象庁在職中から知っており、それに関心をもっていたのだが、それが1966年によりやく出版になった。27.5 cm × 21.3 cmであるから、日本のA4判と似た大判であるが、ページ数は290で、大して厚くはない。

主な内容は3部に分れている。第1部は国際十進分類法(UDC)に従って、気象用語を英語、フランス語、スペイン語、ロシア語の4か国語で並記してある。採用した用語の数は約2200。これが1—56ページ。第2部は各用語の定義で、これは同じくUDC順で、英語の定義(57—123ページ)と、フランス語の定義(125—194ページ)とがある。アメリカ気象学会やイギリス気象局の「グロッサリー」は解説的な書き方だが、これは表題からデフィニションとしてあって、必要最小限の長さで、書き方はそっけない。

第3部はアルファベット順の索引で、195—244ページの間、4か国語に分けてある。各用語につき太字、イタリック、立体と3通りのページ数が示してあるが、太

字は4か国語並記のページ、イタリックは英語の定義のページ、立体はフランス語の定義のページである。そのほかに二つの付録(245—276ページ)があるが、一つは国際水の命名(1—84)で、用語の4か国語の並記と、4か国語による定義がある。この水の命名は第8回執行委員会承認されたもので、海水関係が主な部分を占めている。付録のもう一つはUDCの551.5 meteorologyの細部の表示で、英語とフランス語の両方がある。

WMO事務局でこういう手間のかかる用語集の編さんを企てたのは、もちろん自分自身の便利さを考えることが動機の一つとしてあったのだが、出来上ってみると、違った国語を使う国の間の誤解や誤訳を少なくし、気象の学問上と技術上の国際協力に役立つことは大きいと思う。

緒言によると、この用語集の原稿は1963年には大体書き上っていたというだけあって、新しい言葉、WWW、APT、nephanalysis等が抜けているのは致し方ないことであろう。またUDCに余りこだわり過ぎていながら、551.500.0の部に含まれる用語が2ページにもわたる場合には、この中での配列が一見乱雑で、求める用語を捜し出しにくい欠点もある。(WMO事務局出版、40スイスフラン) (島山久尚)